

現地理解教育研修報告

前ベルリン日本人国際学校教諭

佐賀県佐賀市立日新小学校教諭 太田 真紀子

キーワード：在外教育施設、ベルリン、音楽教育、現地理解、コロナ禍における取り組み

赴任校の概要

学校名：日本語 ベルリン日本人国際学校

現地表記：Japanische Internationale Schule zu Berlin e.V.

<https://www.jap-schule-berlin.de/index.html>

児童生徒数：20名前後で推移

1. 日本の公教育の良さ—現地の音楽関係の人々（現地の教員ドイツ人、在独法人、音楽大学の留学生、演奏家ら10人）からの聞き取りや交流・体験を通しての1考察—

(1) 主題設定の理由

クラシック音楽に携わったことのある人間ならば一度は憧れるドイツ。教科書の中で一度は歌曲「野ばら」や「魔王」、変奏曲「鱒」に触れている。子ども心にも「きれいだな、感動するな」と思っていた。また高校生時代、カラヤンブームが起き、カラヤンが指揮するベルリン・フィルハーモニー管弦楽団に心底憧れた。このような経験を持つ者は少なくないと思う。このような素晴らしい音楽を作ったり、演奏したりする人間を数多く輩出する国の音楽事情や、音楽教育はどうなっているのか知りたいと思ったのがきっかけである。しかし、しばらくベルリンで過ごすうちに、今現在音楽留学生がアジアの学生であふれていること、実際の交響楽団の演奏家の半数ほどがドイツ人ではないことなどが分かってくるにつれ、アジア、日本の義務教育の優れた成果も感じられ、ここで、現在のドイツの音楽事情や(クラシックに限る)音楽教育(義務教育)がどうなっているのか知りたいという気持ちが大きくなり、このテーマを設定した。

(2) ドイツ（ベルリン）の音楽環境について

ドイツだからといってクラシック音楽が日常的に聞こえてくるわけではない。ベルリンではむしろちょっと昔のポップスがカフェなどのBGMで流れてくることが多い。しかし、ライプツィヒ(バッハ記念館やバッハのお墓がある街)では、そこここから合唱の歌声が聞こえてきて、さすがに音楽の街という雰囲気があった。ちなみにライプツィヒ大学は、日本の作曲家滝廉太郎氏が留学した学校である。残念ながら体を壊して卒業はかなわなかった。街の経済も音楽(バッハ)で支えられていた歴史があり、人々の暮らしの中に音楽が深く関わっている感じが満載であった。

ドイツには超一流の音楽家からアマチュアまで数多くの演奏家や演奏団があり、毎日どこかで何かのコンサートが行われている。教会などで開かれるコンサートはごくプライベートなものから、プロの演奏などさまざまであるが、フリーのコンサートの場合、ご近所の老夫婦が散歩途中にポスターを見かけて好きな曲があるからとふらりと立ち寄り、終わったら出演者にご苦労さんと声をかけて帰っていく様子は微笑ましいものがある。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団や、ベルリン放送交響楽団は超一流である。ベルリン・フィルハーモニーのコンサートホールは音響効果抜群であり、コンツェルトハウスは歴史的建造物で見た目も素晴らしい。どんな内容のコンサートに行っても聞き応えがある。

オーケストラのメンバーには今現在、アジア人が多く見られる。ベルリン芸術大学の先生(日本人チェンバリスト)に伺ったが、とにかく今、ドイツ人の学生の練習時間が少ないらしく、一番練習するのが中国人の学生、次が韓国人、次に日本人、中国人の平均練習時間を100%と考えると、ドイツ人のそれは5%だと私見を述べられた。

結果、試験やオーディションで、アジア人が合格していく確率が高くなるということらしい。あまり良い話ではないが、どれだけアジア人ががんばっても、「すばらしいよ、でも君はアジア人だからね」といって、落とされることもしばしばだと聞いた。こういうアジア人差別の現実を耳にすると暗い気持ちになる。

*写真はバルトビューネと呼ばれる野外演奏会場。毎年ラストシーズン(ヨーロッパなので6月末)にここで演奏して締めくくる。人々はビール片手に音楽を聴き、クラシックであるが、曲の合間に口笛を吹いてはやし立てるなど、ロックフェスティバルののりである。



私はアマチュアのコーラスに所属して、ときおりコンサートにも出演させてもらったが、公演などのイベント会場のオーガナイズは良くなかった。前日までころころ状況が変わり、演奏時間が急に倍になったり、減ったり、まず日本では考えられないオーガナイズのまずさが目立った。何しろ当日までピアノの電源が会場にあるかどうかも分からなかったり、持ち時間が20分とっていたのが急に30分になったりするのだ。

子どもたちをポツダムのあるイベントに有志で参加させたが、当日になっても舞台の大きさが分からず、やっと確認できたら聞いた話と全く違うサイズの舞台だったので、大慌てで並び方を替えたり、距離を測り直したりと、大忙しだった。出入りの場所もスタッフによってまちまちで、その場その場の臨機応変さが求められた。

日本人にとっては天下のベルリン・フィルハーモニーだが、ベルリン人は格式張っていない人が多く、カクテルドレスを着用して聞きに来る人を大晦日のジルベスターコンサートの日にしか見かけたことがない。演奏前や休憩時間のお酒・おつまみの飲食サービスが、2022年度コロナが落ち着いたとみなされた時点で再開された。おしゃれよりお酒が好きな人々であった。

*右の写真はベルリン・フィルハーモニー

オペラも国立オペラ(シュターツオペー)と、民間のドイチェオペーがあり、9月から翌年の6月末までをシーズンとしている。2020年はコロナのためにほとんど何も行われなかった。2021年の6月あたりから徐々に開催されるようになったが、当初は短い時間のコンサートが催された。徐々に普通通りの開催時間に移行した。オペラ鑑賞にはさすがにドレスアップしている人を見かける。



うになるが、王子が悪魔と戦い王女との愛を貫くといった内容であった。しかし、今回見た「白鳥の湖」の解釈は相当悲惨で、王子と母親が近親相姦、母親と悪魔ロットバルトが愛人関係、悪魔にだまされた母親が悪魔の娘を王子の妃に選ぶ。だまされたことを知った王子が悪魔と戦い悪魔も王子も死ぬ。最後残された母親が王子の亡骸を抱きしめて号泣するといった、身も蓋もない内容であった。

2. 日本とドイツの公教育の違いードイツの学校教育の特徴ー

(1) 落第がある

教育については、厳しい言い方をすると、「切り捨てる教育」である。ベルリンに長く在住で、高校の先生をしている方から、「日本は低位の子どもも何とかすくい上げようとする教育だけれど、ドイツは切り捨てる教育です」と聞かされたときは驚いた。ヨーロッパの中でも第2次世界大戦の反省から、差別に対しては認識が深く、差別に繋がっていくような行動には意識が高いはずのドイツがまさかと思ったが、間違いなさそうである。

小学校の段階でも、落第がある。日本人学校にも、「ドイツの学校から落第を言い渡されて納得いかないです」と言って駆け込んできたご家庭も数件ある。コロナで長い間ロックダウンしていたので、オンライン授業もやっておらず、放置されたままの子どもたちが、在籍学年の学習内容が身につけていないと言うことで親の希望で落第させて良いとの通知を、学校を通さず出し、ベルリン中が大混乱という一幕もあった。

大体小学校4年生の終わりには進路が決まってしまうので、意識の高い家庭は早くから評判の良い学校を探して引っ越しも辞さない。富裕層の家庭は外国の学校に入れてしまうとも聞いた。中学校が進路によってギムナジウムや職業学校、低学力の子どものための学校と、きっちり分かれてしまう。

ベルリンでは子ども向けのリーズナブルな習い事が少ない。両親が芸術家やスポーツ選手で、子どももその道に進ませたい場合、その道専門の学校があると聞く。例えば音楽に特化した学校だと、音楽や楽器のクラスと主要教科を教える学校が存在する。それがフィットする子どもは効率的に学べると思うが、他の可能性を考えるとこの選択はない。ドイツの方に中学校の部活を説明すると、それは、子どもの可能性を伸ばせば素晴らしいプログラムだと誰もが絶賛する。

(2) 技能教科の教育課程が自由である。

技能教科に統一した教育課程やカリキュラムがなく、教師の裁量に任されている。日本の教育のように、1時間ごとの活動をきちんと計画を立てて取り組むわけではないようで、アバウトなものらしい。なので、規制の仕方も大まかで、その規制をどう解釈するかで毎時間悩んでいた。(例えば卒業式とか、入学式とか〇〇式というイベントに一生懸命練習して歌うという文化がないので、興味のある教員だけが取り組む感じという)。

特に小学校1年生から3年生までは、1つのクラス、同じ担任教諭で持ち上がるため、その担任の裁量に任せられ、適宜に行っている。

聞き取りを行った10名のうち9名までが、「音楽や図工には教科書はない」といいきった。しかし実は存在した。やはり教育課程が曖昧なのだと感じた。音楽の教科書を見せてもらったが、とにかく文字や音符が小さい。低学年の児童が読み取るには難易度が高い。

楽器(鍵盤ハーモニカやリコーダー)は持たせておらず、何人かドイツ人の若い実習生に音楽の授業を見せたが、「こんなに楽しい、内容の濃い授業は受けたことがない」と口をそろえて言っていた。ベルリン日本人国際学校にも、中途入学の問い合わせが多かったが、理由として、保護者の立場からだとドイツの学校の先生やシステムと合わない、というのが一番大きなものだった

・気になる日本との違い

小1～小3までは1つのクラス、同じ先生で持ち上がる。
小4からいきなり勉強が難しくなり、小5の年齢から行く学校が変わる。
その学年の課程を理解していないと、学校側から留年を進められることがある。
学校の進めの留年に大抵の親や子どもは従っている。
5年生以上の学校はそれぞれの特徴を売りにして経営している。
例えば、英語。音楽を特化したクラスがあります等
学校に通わないと罰金を科せられる。

(3) 小学校4年生の終わりで進路が決定する

ドイツの教育制度は州によって違うが、教育については、厳しい言い方をすると、「切り捨てる教育」である。前述した通り、小学校4年生の終わりには進路が決まってしまうので、意識の高い家庭は早くから評判の良い学校を探して住居も考えるという。難民が増えて、ことにウクライナ問題が起こってからより公教育離れが進み、富裕層は外国の学校や、インターナショナルの学校に入学させていると聞く。

ベルリン芸術大学で教鞭をとっておられるチェンバロ奏者荒木紅さんに聞いた。

やはり小学校の低学年の間（4年生ぐらいまで）ちゃんとした教育課程はないようにみえた。それぞれの担当教員の思いに任されているということ。一度お子さんの学校で出し物があるのでお金も出したが結局プロのサーカスの人が演技をし、その周りを子どもたちがちょろちょろしていただけたとの感想を聞いた。

日本の学校での文化発表会や、卒業式、運動会等の時間をかけて子どもたちが少しずつ創りあげていくものとはかけ離れているらしい。そこにはドイツ（ベルリン）ならではの理由があり、ナチスドイツのあり方への反省から、拳手もダメ、そろってきちんと並ぶのもダメ、行進もダメ、といった軍隊につながるような集団行動に対して異常なほどの拒否反応を示す人が多い。そのためにそろって何かをするということに異様なまでに嫌悪感を示す人々がいる。その一方で、ドイツの古い物を大切にするという習慣にも捨てがたいところはある。ベルリン在住の音楽家の方からお聞きした話。作曲家メンデルスゾーンの子孫の方のお誕生日会に行き行ってチェンバロを演奏したことがあるとのこと。さすがに高名な作曲家も身近な存在になるのだなと感じた。

音楽とは直接関係ないが、【森鷗外記念館】に赴いたとき図書室に多くの蔵書があるのに驚いた。しかも、純日本文学の全集だった。日本人でもすでに読む人が少なそうなのに、ドイツの物好き者は読んでいるのだろうか？訪れる人数も減ってきているようだが、維持できるのか気になっているところへ、受付の青年(日本語の話せるドイツ人学生)が、「ドイツで勉強して、こんなにたくさんの方の事を成し遂げた人の事を人々に忘れさせないようにがんばりたい」と言った言葉に非常に感銘を受けた。古い物を大切にする良さがこの一言にこめられている。

現地校はクラス担任をしている教員が年度途中で突然辞めたり、休暇が残っているからと言って卒業間際の子どもたちを残して長期に休んだり、ということがおきている。そうすると自習が多く、放置されているらしい。驚いたことにそれに対して保護者が強烈にクレームをつけることなく、(当然クレームはつけるだろうが、日本のように学校が対応しないので)あきらめているようだ。また、教員とソリがあわなかったり、多動気味で学校から注意されたり、成績が振るわず落第を言い渡されたり、そういう理由で困り果てたご家庭が日本人学校に体験入学してくるケースが数件見られた。

ドイツは難民をたくさん受け入れているので、良いことではあるが、そのために公教育の質が落ちていく(I世代前のアメリカのようである)そのために、上級の学校の質も少しずつ落ちていっていると聞く。そうすると富裕層やゆとりのある家庭はますます公教育から離れていくといった悪循環がある。

3. 盲学校見学



盲学校 (ZEUNE-SCHULE) に行ってきた。シュティエグリッツの中心部にある築300年ほどの趣のある古い建物であった。大人の盲人用アパートが隣接している。詳しいことは分からないが、ウクライナからの難民の中の盲人を30人強収容したとのこと。戦争のトラウマがあり、パニックに陥っている人がいるということだ。気の毒なことである。見せてもらったのは5名ほどの小学校高学年から中学1年生くらいの子どもたちの音楽の授業だ。いろいろディスカッションしたのちにアウラ (いわゆる講堂) に行き、ドイツの古い歌や、ジョンレノンの曲などを聞きながらおしゃべりしたり、身体反応をさせたりする。授業の終わりに、持参したリコーダーで、「さくらさくら」や「ふるさと」、「ミッキーマウスマーチ」を吹いた。静かに聞いてくれた(盲学校の児童生徒の写真を撮るのはNGであった)。ジムを見学したが、いろいろな機材 (トランポリンやマット、鉄輪) など日本のスポーツメーカーが寄付したものだ聞いた。

本や教室の入り口など様々なくふうはなされていたが、古い建物なのでバリアフリーにリノベーションすることは不可能なことのようである。日本のように階段の上り口や降り口に工夫がなされていることはない。

教師の1人は日本に行ったことのある人物であったが、日本で交通信号の手前に盲人用のでこぼこがあること、渡れる時間中音楽がながれること、電車のホームに安全のためにでこぼこを設置してあることを絶賛していた。ドイツ、ベルリンにはそのような配慮した場所は見当たらない。ドイツは自転車幅を利かせている。自転車優先道路が歩道の歩きやすい場所を占領しているような感がある。そこをものすごいスピードで自転車が走り抜けるのだから危険極まりない。健常者でもよくぶつかりそうになりヒヤッとする場面があるが、よく目の不自由な人々が重大事故に巻き込まれないものだといひそかに感心している。



4. まとめ

それぞれの国の教育のあり方にはそれぞれの事情や歴史が深く影響しているものであるから、軽々には論じることが難しいが、色々差し引いても、ドイツは「切り捨てる教育」で、日本は「救い上げる教育」であると言えると思う。古い慣習や建物を大切にすることは素晴らしいことである一面、変わりにくい、変えていこうという意識が少ないといえる

(1) 研究のまとめ

ドイツには、演奏会のできる施設、(国立歌劇場やドイツ・オペラ、コンチェルトハウス、ベルリン・フィルハーモニー、諸教会)がふんだんに存在した。検索すれば毎日どこかで演奏会が行われていた。もちろん美術館も博物館もたくさんあった。ベルリンだけでもそんな状態である。ドイツ全体の日常生活でどれだけの芸術があふれているのか、その量のすごさに打ちのめされる。

もちろんヨーロッパの王侯貴族が主役だった時代に大活躍した音楽家や画家がその町の経済を支えたという事実もあり、「音楽という物の存在の受け止め方」の日本との違いも大きく感じさせられる。

しかし再度述べるが、今回コロナにより2年間は一切の文化活動の体験ができなかった。普段の音楽の授業もその中で大きな制約を受けた。歌唱活動はもとよりリコーダーの演奏も制限された。2つの大きな中心活動を止められて当初はこの環境の中で子どもたちにどうやって音楽の良さやドイツにいることの良さを伝えられるか悩んだ。結果リズム指導、打楽器や鍵盤楽器の指導、音楽づくりに時間をかけることができ、子どもたちは合奏が大好きになった。また、ドイツ人の音楽の先生の指揮で歌ったシューベルトの歌曲「魔王」との関りで、ドイツ語、ドイツ音楽は子音の発音がとても大切で意味があること、1人が声の出し方でいろいろな役割を演じ分けることができること、冬寒くて暗いドイツの環境だからこそ生まれた音楽であることを、肌で感じ取ることができた。そして、音楽の教科書に必ず登場する日本の有名な作曲家滝廉太郎氏がライブツィヒ大学に留学していたという事実のおかげで、日本歌曲の「花」「箱根八里」「荒城の月」をより身近に感じ、興味を持って歌えたという感想を持つことができた子がいた。これらのことにより歌唱やリコーダー演奏に取り組みなかった時間を補足して余りある成果を出せたと思う。

そして、学校関係者や実習生・ドイツ語の先生たちに聞き取りをした結果として、つくづく感じたことは、日本の公教育（ことに小学校）が、ドイツのそれと比較していかに優れているかということである。技能教科を含む全教科にそれぞれの発達段階に応じて教育課程があり、教えなければならない内容が明確であること、それぞれの教科に適切な教材や教具があること、学習態度の指導が適切になされていること、制度的な面からも、その後の人間関係を考えて落第・留年はあり得ないこと、(ドイツでは小学校4年生の終わりで大体進路が決まってしまうので、あまりに子どもの可能性や才能を見いだす時間が短すぎると感じる)部活動の存在の意義の大きさなどがあげられる。現地で教鞭を執っているドイツ人の教員も「日本の公教育、殊に小学校低学年の教育内容は素晴らしい、ぜひ世界中にその良さを宣伝すべきだ」といい、自分のお子さんも低学年の間、日本人学校に通わせたという。

本題である音楽科を取り上げていえば、もちろんドイツでは歌唱指導の中で、日本より発音(特に子音)をしっかりと意識させており、一つ一つの言葉を大切にしていることは窺える。しかし教科書を見せてもらったが、記載が細かく難解で、全ての児童が理解できるとは思えなかった。その点日本の教科書は、記譜も子どもの発達段階に応じて記載されている、拍が分かるように印字されている等、子ども目線であらゆる工夫がちりばめられている。それらの理由から日本の公教育は世界に自慢できる物であるといえる。

ドイツには不登校が存在しない。もちろん学校に行きたくない・行けない子どもはいる。しかし、国の方針として、学校には通わせないといけない、もし通わない場合は罰金が科せられる、という法律があり、もし通わない児童生徒がいた場合、青少年教育省が立ち入ってくるという。

ドイツ在住の人々はそれで納得しているということだが、もし通っている学校と合わない場合はどうなるのか尋ねてみたら、転校をすすめられるので転校を余儀なくされるということであった。

そういう学校教育のあり方に納得しているドイツの人々。それを厳しく感じるのは私だけだろうか？不登校は多いが、どこまでも子どもにとって可能性の追求できる余地がある日本の教育、私は日本の公教育の良さが世界に広がっていけば良いと考える。